

ハイム・ギノット 著
久富節子 訳
『先生と生徒の人間関係』

(サイマル出版会)

飯長喜一郎

私自身の子育てに役立った本を紹介します。と言っても、私に役立った本は、同じ著者の『親と子の心理学』です。『先生と生徒の人間関係』は、その先生判であり、同じ考え方で書かれています。二十数カ国語に翻訳されています。

本書に、若い先生の次のような言葉が紹介されています。

「ぼくは子どもが何を必要としているか、もう知っていますよ。暗誦できるほどです。子どもは教師に受け入れられ、尊敬され、好かれ、信用されなくてはならない。勇気づけられ、元気づけられ、活動的なことをさせてもらい、楽しませてもらわなければならない。それから探求し、実験し、行動に移せるように導いてもらわなければならない。ああ、くそくらえだ！あまりに多くを望みすぎるんですよ。ぼくに欠けているものは、ソロモンの知恵とフロイトの洞察力と、アインシュタインの知識とフロレンス・ナイチンゲールの奉仕精神なんですよ。」

教育や保育にたずさわるひとは、多かれ少なかれこのように嘆いたことがあるのではないでしょう。か。良い教育、良い保育とは何であるか知っている。しかし、それは一体どうしたら可能なのだろうか。日常の活動の中で、目の前の一人ひとりの子どもたちにどうすることなのだろうか。

それが分からないから苦労しているのに、答えてくれる本はなかなかないものです。

この本は答えてくれます。

著者ギノットは、カウンセリングや心理療法の専門家です。ということとは、人間一人ひとりが、自分自分の問題に立ち向かい、解決して行けるようになるために、どう援助したら良いかを考え実践する人です。そしてここには、その考えを教師と子どもたちとの関係に応用したらどのようなことになるかが、描かれています。

「七歳のルディが急に泣き出した。先生は彼に近寄

って、こう言った。『何かあったのね』

ルディはこっくりうなずくと、新しいおもちゃの自動車を指さしながら、『車輪がとれちゃったの。』

ジュリオがやったんだ』と叫んだ。『わざとじゃないよ』。ジュリオが、こうたたみかけた。

『これは新しい自動車なんですよ、ルディ』。先生は心配顔でこう言った。

『うん』とルディ。

『そう、大変なことになっちゃったわねえ』

ルディは泣きやみ、二、三分黙ったままでしたが、こう切り出した。

『そうだ。家にまだ他の車があるんだ』

危機は去った。簡潔で明確な同情を与えることがどんなに力となり得るか、このできごとが物語っている。……」

どうです。わかりやすいでしょう？一冊の本全体がこのようなシナリオで成り立っているのです。

こういう本は、えてして安っぽくなってしまいがちです。しかし、本書は読み進むに連れてギノットの人間に対する暖かい信頼感が感じられて来ます。そして、一見ハウツー本なのに、そのような人間への信頼感が読み手にも持てるような感じがして来ます。

どういふ言葉が子どもたちを傷つけるか、という例もたくさん生々しく描かれ、私なども身につまされる思いをしたものです。

ギノットの描く良い対応の基本のひとつは、相手の気持ちを（それがたとえ不道德だったとしても）しっかり受け止めること、そして、受け止めているということを相手に工夫しながら伝えることと云えるでしょう。……と書いてみて、やはりこういう抽象的な言い方ではダメだなと思います。（苦笑）

ともかく、この本は子どもたちとの付き合い方のヒントの宝庫です。最近の本ではないし（原著は一九七二年刊）、描かれる例は小、中学生がほとんど

ですが、役に立つこと、子どもたちに会う元気が出ることうけあいです。木陰で読んでホノボノしてきます。

内容が多いので、章題をあげておきます。

- 一 「教師は何に悩んでいるか」
- 二 「よい教室の条件」
- 三 「わるい教室の条件」
- 四 「子どもの信頼を得る方法」
- 五 「ほめ言葉の危険性」
- 六 「効果的なしつけの方法」
- 七 「子どもと教師が衝突したとき」
- 八 「子どもの自主性を育てる」
- 九 「学習への動機づけ」
- 十 「学習方法を変える」
- 十一 「よい教育環境をつくる基礎」
- 十二 「教師は子どもの人生をつくる」

（お茶の水女子大学）